白くま親子の視写紙芝居を作ることを通して，様々な文章表現に親しむ。

第1学年2組　国語科学習指導案

指導者　吉川　奈津子

１．単元名　白くまおや子とたびに出よう

２．学習材　「うみへのながいたび」（教育出版　ひろがる言葉　１年下）
「きこえてきたよ、こんなことば」（教育出版　ひろがる言葉　１年下）

３．単元について

（１）本単元でつけたい力

本単元では，主に，小学校学習指導要領・国語〔第１学年及び第２学年〕の「Ｃ　読むこと」における以下の能力を身に付けさせることをねらいとしている。

Ｃ　読むこと	
内容	ア　時間的な順序や事柄の順序などを考えながら，内容の大体を捉えること。
言語活動例	
	イ　読み聞かせを聞いたり物語を読んだりして，内容や感想などを伝え合ったり，演じたりする活動。

本単元では，学習材「うみへのながいたび」を読んで，本文を視写し，白くま親子の絵を描いて「視写紙芝居」を作成する学習を行う。この活動を通して，時間の経過に沿って白くまの兄弟たちが成長していく様子や白くま親子の行動を捉えることができるようにさせていく。

（２）単元の目標

【知識・技能】

○時間の経過を表す言葉などに気をつけて音読することができる。（１（１）ク）・・・㊟

【思考・判断・表現】

○白くま親子の写真から，兄弟たちの成長していく様子や白くま親子の行動など，「うみへのながいたび」の内容の大体を捉えることができる。（２Ｃ（１）イ）・・・㊟

○時間の経過を表す言葉から，誰が何をしたのかを捉えることができる。（２Ｃ（１）ア）・・・㊟

【主体的に学習に取り組む態度】

○学習の見通しをもって，情景描写や白くま親子の行動を具体的に想像し，視写紙芝居の絵を描いたり，ふきだしに白くま親子の言葉を想像して書こうとしている。・・・㊟

（３）本単元で行う言語活動

本単元では，教材文「うみへのながいたび」を読んで，本文を視写し，白くま親子の絵を描き，白くま親子の言葉を想像してふきだしを書く「視写紙芝居」を作成する言語活動を行っていく。これは，小学校学習指導要領「Ｃ読むこと」における，言語活動例「イ　読み聞かせを聞いたり物語を読んだりして，内容や感想などを伝え合ったり，演じたりする活動」を踏まえている。「視写紙芝居」作成の言語活動にした意図は主に３つある。１つ目は基本的な文字習得が期待できること，２つ目に場面ご

とに視写していくことで場面の様子の理解を助けること，３つ目に，絵を描かせることで白くま親子の旅の様子や白くまの兄弟の成長の様子を，想像を膨らませながら捉えさせやすくすること，以上３点である。

まず子どもたちには，教師が着語読みを行うことで，「うみへのながいたび」のお話に出合わせる。そのあと本文の視写を行い，教科書の絵を真似しながら白くま親子の絵を描いていく。絵を描かせることで，時間の経過によって白くまの兄弟たちが母ぐまと共に成長していく様子を捉えさせる。また，本文中に出てくる「目をまんまるに」「まぶしすぎる」「ぬけるような青いはるの空」などの特徴的な言葉や表現の仕方が子どもたちの絵から感じられることを期待する。視写プリントは，初めは全員「白紙」のもので行わせる。しかし，白紙で書くことが難しい子どももいると考えられるため，子どもたちが後で自分で選択できるよう，「全部なぞり」・「穴うめ」２種類を用意しておく。「全部なぞり」は白紙で書くときのお手本として使ってもよいこととする。穴うめは，文の書き始めだけ記したものである。この穴うめの形にすることで，書き始めがどこかわかりやすく，子どもたちが迷わず活動できると考える。どの紙を使って作成するかは，必要に応じて子どもたちに選択させる。

白くま親子の絵に書くふきだしの紙は，３～４行ほど書ける「罫線に補助線を入れたもの」と「マス目」のものを用意する。マス目のものは行が多いものと少ないものを用意する。どちらのふきだしも文字の大きさを均等に，乱れず書けることをねらいとする。文字を多く書くことが難しい子どもや文字習得が未熟な子どもには，行が少ないマス目のものを使用することで無理なく書けるのではないかと考える。それでも想像して書くことが難しい子どもには，教師が本文を細かく区切りながら内容を確認し，その子の言葉を薄く書いてなぞる形にする。また、母ぐまと子ぐまで区別がつくようにふきだしの紙の色を変えて子どもたちに提示する。視写紙芝居とふきだしが完成したら，自分が書いた視写とふきだしを読み返す習慣を付けさせるとともに音読の仕方を練習させる。

（４）学習材について

本学習材，「うみへのながいたび」は，白くまの兄弟が生まれ，巣穴から出てきたところからお話が始まり，母ぐまと共にえさを求めてこれから暮らしていく海へ向かって長い旅をしていくお話である。白くまの兄弟の成長と，それを見守る母ぐまの様子がわかりやすくえがかれている。また，最後の段落に「このようにして，何百何千もの白くまの親子がきたのうみで，今日もくらしている……。」と書かれていることから，これからもずっとこの旅が続いていくこと，つまり命の繋がりを表していると考えられる。動物に興味がある１年生にとって親しみやすいお話であると考える。また，白くまの兄弟たちが成長していく様子や母ぐまとの旅の様子の写真と文章を手掛かりに，登場人物の白くまが何をしたのかを考えていく。本単元の学習で，「うみへのながいたび」を視写し，自分で絵を描くことで，時間の経過に沿って白くまの成長していく様子を捉えさせていきたい。

本文中には，「ふゆのあいだじゅう」「２年半ばかり」「百日近く」などといった「時間」を表す言葉が多く用いられ，時間の経過を捉えるための手掛かりとなる言葉である。子どもたちにとって時間を表す言葉だけでは，時間の経過を実感することが難しい子どももいると考えられるため，カレンダー等を用いて時間の経過が視覚的にもわかるようにしていく。以上のことから，物語の写真と文章を照らし合わせながら，自分で視写紙芝居をつくる活動を通して，時間の経過とともに登場人物である白くまがどう成長していくのか，どんな旅をして海までたどり着くのかを子どもたちに捉えさせるのに適した学習材であると考える。

（５）子どもの実態（男子１５名　女子１５名　計３０名）

本学級の子どもは，読み聞かせや読書が好きな子が多く，休み時間になると進んで図書室に本を借りに行ったり，教室内にある絵本を読んだりと読書を楽しんでいる。「すずめのくらし」の学習をきっかけに，図書室に鳥の本を探しに行ったり，すずめがでてくるお話を教師に話してくれたりと常に本が子どもの身近な存在になっている。また，毎日家庭学習で音読の宿題を出しており，これまで学習した教科書の文章を何度も繰り返し読んでいる。

子どもたちはこれまで，「すずめのくらし」「だれが，たべたのでしょう」「はたらくじどう車」などの学習を通して，視写本づくりを行ってきた。視写本をつくりながら文章を読み進めることで，出来事の順序を捉えたり，文の構成を考えたりしながら学習を進めてきている。視写をすることで，本文中に出てくる言葉や書き方を真似して一から自分で文章を考え書けるようになってきている。「すずめのくらし」の学習では，写真を並べ替えしながらどの文と対応するかを学習した。また，文章構成が「場所」→「問いかけ」→「答え」→「答えの説明」になっていたりすることを学習し，群れで休んでいる様子，巣を作る様子，花の蜜を吸う様子の３場面を，自分たちで文章構成を基に続きの文を書くことができてきている。

本単元では，これまで学習してきたことに加え，さらに詳しく時間的順序を表す言葉や様子を表す豊かな言葉が多く出てくる。着語読みでお話に出合わせ，それから視写と絵を描く活動を場面ごとに繰り返すことで，白くまの兄弟たちが時間が経過していくとともに成長していく様子を捉えさせていきたい。

（６）指導観

〔見いだす〕

□本単元の目標（めあて・ねらい）を児童に明示する。

①学習の見通しをもたせ，主体的に学習に取り組ませるために単元のゴールを示す。

本単元の導入では，教師が作成した「うみへのながいたび」の視写紙芝居のモデルを提示する。実際に教師のモデルを子どもたちに読み聞かせすることで「うみへのながいたび」のお話と出合わせ，これからどんな学習をするのか具体的にイメージをもたせていく。視写紙芝居につけた白くま親子のふきだしも読んでいくことで，どんなことをふきだしに書いていくのかも捉えさせる。今回の学習では，時間の経過に沿って白くまの兄弟たちが成長していく様子や白くま親子の行動が捉えることができるように本文の視写と子どもたちが自分で絵を描く活動を取り入れる。また，白くまの成長を理解しやすくするためにどんな言葉を言っているか想像してふきだしを書く活動も行う。

本単元で作成する視写紙芝居のタイトルは，第１時の学習計画を考える時に全員で考える。その意図としては，自分たちで考えたタイトルの紙芝居にすることで愛着をもち，子どもたちの作成意欲を高めることに繋がるのではないかと考えたからである。

〔自分で取り組む〕

□児童が自分の考えを形成したり，思いや考えを基に想像したりする時間を確保している。

②絵と文から誰が何をしたかわかるように，視写紙芝居の絵は自分たちで描かせる。

視写紙芝居を作成するにあたり，時間の経過によって成長していく様子，海に向かう旅の途中で誰が何をしたのかを理解できるように子どもたちに絵を描かせながら視写紙芝居を作成させていく。子ども

たちの絵から白くまが成長していく様子や，時間の経過とともに海へ近づいていく様子が絵に表れることを期待する。

〔自分で取り組む〕

□子どもが進んで読書を行うことができるように環境を整える。

③白くまや動物が出てくる本を用意し，たくさんの本と出合える環境をつくる。

「うみへのながいたび」を学習していくにつれ，子どもたちは白くまや他の動物たちへの興味関心が高まると考えられる。そこで図書館に依頼して，白くまをはじめ他の動物が出てくる本を多数用意する。そうすることで，本を選ぶのを楽しんだり，お気に入りの本を見つけたりすることができるようにしていく。また，朝の読み聞かせの時間を使うことでたくさんの本と出合えるよう支援する。

〔広げ深める〕

□子どもが多様な考えを理解できるように，互いに学び合う場面を設定する。

④視写紙芝居の自分で描いた絵を振り返りながら，場面の内容を自由に語らせ合う時間をつくる。

場面ごとに視写紙芝居を作成した後，どんな絵を描いたのか子どもたちから自由に発言させ，共有する時間を設ける。そうすることで，自分の描いた絵をもう一度振り返り，白くまの兄弟や親子がどんな様子なのか改めて内容を理解することに繋がると考える。また，友達の発言を聞いて，自分がどんな工夫をして絵を描いたのか，視写紙芝居と向き合う時間にさせていく。

〔まとめあげる〕

□子どもが作品を振り返り，学んだことをまとめる場を設定する。

⑤授業の終わりに国語日記を書かせたり，単元の終わりに学習について振り返らせたりする。

授業の終わりに国語日記（学習を振り返り，視写紙芝居を作成してみてどうだったかなど）を書かせるようにする。この日記によって，本時で学習してわかったことや初めて知ったこと，自分がどんな捉えで絵とふきだしを書いたかなどの子どもの考えを知ることができる。また，単元の終わりに①「視写紙芝居を作成してどうだったか。」②「視写紙芝居を友達と交流してみてどうだったか。」の２観点で振り返りをさせることで自分自身の成長を客観的に捉え，達成感を味わわせていきたい。

４．全体指導計画（全９時間扱い）

	時	主な学習活動	○教師の留意点　☆評価（方法）
第一次	1	学習の見通しをもつ。 学習計画をつくる。 着語読みをする。 ・教師のモデルと出合い，単元のゴールを知り，学習の見通しをもつ。	○着語読みをすることで，文章の言葉について説明を加えながら読んだり問いかけたりして内容の大体を捉えるとともに，教材への関心を高めさせる。 ☆作品と出合い，これからの学習に見通しをもっている。 （㊟ 発言・ノート）

第二次	2本時	視写紙芝居を作成する。 ・１場面の視写と絵とふきだしの作成をする。	○2 種類の視写プリントを用意しておき，白紙で視写することが難しい子どもにお手本として提示する。 ○ふきだしは罫線に補助線を入れたものとマス目のものを用紙し，字が乱れず書けるようにする。 ☆時間の経過を表す言葉から白くま親子の行動を具体的に想像し，視写紙芝居を作成している。 （㊟発言・ワークシート）
	3	視写紙芝居を作成する。 ・２場面の視写と絵とふきだしの作成をする。	
	4	視写紙芝居を作成する。 ・３場面の視写と絵とふきだしの作成をする。	
	5	視写紙芝居を作成する。 ・４場面の視写と絵とふきだしの作成をする。	
	6	視写紙芝居を作成する。 ・５場面の視写と絵とふきだしの作成をする。	
	7	視写紙芝居を作成する。 ・６場面の視写と絵とふきだしの作成をする。	
	8	視写紙芝居を作成する。 ・７場面の視写と絵とふきだしの作成をする。	
第三次	9	学習のまとめをする。 ・ペアで完成した視写紙芝居を交流する。 ・国語日記を書く。 ①視写紙芝居を作成してどうだったか。 ②視写紙芝居を友達と交流してみてどうだったか。	○２観点で振り返りを行うことで，自分自身が成長したことを客観的に捉え，達成感を味わわせる。 ☆単元全体の学習について振り返ろうとしている。 （㊟発言・ノート）

５．本時の指導（２／９）

（１）目標

時間の経過を表す言葉から白くまの兄弟の行動を想像し，視写紙芝居を作成することができる。

【思考・判断・表現】（２Ｃ（１）ア）

（２）展開

時配	学習活動と内容 ◎教師の発問　・子どもの反応	○教師の留意点　☆評価（方法）
3	１．本文を音読する。	○モニターに①場面の写真を写し，その場面の情景をイメージしやすくさせる。
3	２．前時でつくった学習計画を確認し，本時の学習問題を確認する。 ①ばめんをししゃして，えとふきだしをかいて，ししゃかみしばいをつくろう。	
２５	３．視写紙芝居を作成する。 お手本とふきだしは自分がやりやすい方を選んで作	○モニターに①場面の教師モデルを映し，絵を描くことが苦手な子どもでも真似して作成できるようにしてお

	成する。 ①視写する。 ②絵を描く。 ③ふきだしをかく。 ④音読する，自分で読み直す。	く。 ○全員に白紙の視写プリントを配付する。 ○２種類の視写プリント（全なぞり・穴うめ）を用意し，白紙で書くことが難しい子どもには，真似して書くお手本として渡せるようにしておく。お手本として使うのはどちらの紙でも良いこととし，子どもたちに選択させる。 ○ふきだしは２種類（罫線に補助線を入れたもの・マス目）用意しておく。 ○ふきだしの紙は，母ぐまと兄弟で色を変えて提示する。 ○ふきだしを書くことに困っている子どもがいたら，教師が一緒に本文を読んで内容を改めて確認する。 ○書くことが難しい子どもには対話で出てきた言葉を教師が書き，それをなぞらせる。 ☆時間の経過を表す言葉から白くまの兄弟の行動を想像し，視写紙芝居を作成することができる。 （㊟発言・ワークシート）
7	４．子どもたちの絵をもとに場面の内容を自由に話し，共有する。 ◎どんな絵を描きましたか。 ・外の世界が明るすぎてびっくりしている顔を描いたよ。 ・外の世界にわくわくしてそうだから，目をまんまるにしたよ。	○自分の紙芝居の絵を見ながら，１場面の内容について子どもたちから自由に発言させる。 ○友達の発言を聞いて，自分の描いた絵を振り返らせる。
7	５．国語日記を書く。	○１場面の視写紙芝居を作成してみてどうだったかを国語日記に書かせる。